

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【福岡県】

福岡県立直方高等学校

1 実践テーマ	【Ⅲ・Ⅴ】
2 実施対象者	生徒、教員あわせて約700名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名 (保健体育・総合的な学習の時間)</p> <p>② 行事名 ()</p> <p>③ その他 ()</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名 ()</p> <p>② その他 ()</p>
4 目標 (ねらい)	<p>オリンピック・パラリンピック教育の目的は、オリンピック・パラリンピックを題材として</p> <p>①スポーツの意義や価値等に対する国民の理解・関心の向上</p> <p>②障がい者を含めた多くの国民の、幼少期から高齢期までの生涯を通じたスポーツへの主体的な参画（「する」、「見る」、「支える」、「調べる」、「作る」）の定着・拡大</p> <p>③児童生徒をはじめとした若者に対する、これからの社会に求められる資質・能力等の育成</p> <p>を推進することを目的とするものである。</p> <p>今回、ロンドンパラリンピック金メダリストのゴールボール日本代表である小宮正江選手を招いての講演会を行う。講演会後には、スポーツ科学コースの1年生、2年生を対象として、ゴールボールの体験授業を実施する。オリ・パラ教育が目指す目的をこの講演会、体験を通じて少しでも達成できればと考える。</p>
5 取組内容	<p>「オリンピック・パラリンピック講演会・体験」</p> <p>講師 小宮 正江 氏 ロンドンパラリンピック金メダリスト ゴールボール日本代表</p> <p>テーマ 【人生の壁はジャンプ台】</p>



【講演内容】

「見えない」強みに気付いた

小学時代

小学校2年の時に医師から視力の低下と徐々に視野が狭くなる網膜色素変性症と告げられ「将来失明する可能性がある」と言われました。ただ小中学時代は、昼間は黒板の字も見えていました。体を動かすのが好きだったので、同級生と一緒に運動もしました。

中学時代

中学時代は、バレーボールに打ち込みました。毎日2、3時間練習し、土日にも試合や合宿に行っていました。視野が狭くボールを追いかけ切れないので、チームメイトの動きや癖を予測して動きます。「どうすればみんなと同じようにプレーできるか」をいつも考えていました。

高校時代

高校に進んでもバレーボールを続けたいと思っていましたが、その頃にはさらに視野が狭くなっていて、部活を終えて暗くなってから1人で帰宅するのが難しいと思い、諦めました。思春期だったこともあり、できるだけおとなしく、目立たないようにしていました。透明な扉にぶつかったり、階段を踏み損なったりしても「私ってちょっと鈍くさいね」と心の中でごまかしながら、本当は自分に自信が持てなくなっていました。

大学時代

気持ちが変わったのは大学生になってからです。サークルに入り、仲間とも巡り合え、自分のことも考えられるようになりました。サークルで肢体不自由や知的障がいの子供たちと接しました。無邪気で元気な姿を見せる子供たちを見て、障がいがあってもその子の「良さ」や「強み」があることを知りました。私も「見えない」ことが強みになるのではないかと考えられるようになりました。

大学卒業後

大学卒業に就職をしましたが、2000年に「しんきゅうマッサージ師」の資格を取るため入所した福岡視力障害センターで指導者に出会い、ゴールボールを始めました。アイシェイドを着け、鈴入りのボールを使う競技ですが、私にとっては再びボール競技ができる喜びや楽しさがありました。



2020年東京パラリンピックに向けて

今は、20年の東京パラリンピックへの出場を目指しています。体力的にも技術的にも課題はありますが、中学時代と同じようにどうすれば課題を打破できるか一生懸命考えています。自分の限界に挑戦し、チームの勝利に貢献できるよう力をつけたいと思います。

直方高校の生徒さんへ

「やってやれないことはない。やらずにできるわけがない。」



～生徒の感想～

- 目が見えないことの怖さや大変さを感じ、そういう人も平等に暮らせるように支え合うことが必要だと思った。
- 障がいの有無や能力にかかわらず、どんな人でも平等に楽しめるスポーツだった。
- 障がいがあることについて理解することができ、共生していくことが素晴らしいことだと思った。
- 今まで当たり前だと思っていたことが、当たり前ではなく、様々なことで恵まれていることを改めて感じた。
- コミュニケーションの大切さをゴールボール体験を通して学ぶことができた。

	
<p>6 主な成果</p>	<p>ゴールボール選手のパラリンピック出場経験のある講師を招いての講演会、体験を行った。生徒の反応は予想以上によく、熱心に聞き積極的に参加する姿が随所にみられた。トップアスリートの経験や物事の考え方など、生徒が生きていく上で人生の糧になると思う。このような体験は非常に重要であるとあらためて考えさせられた。</p>
<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・事前にゴールボールの競技特性やルールを映像で紹介し、講演会、体験に臨ませる。 ・事前にどのような話が聞きたいか調査し、話題提供の参考にする。 ・事前にDVD映像で講師を紹介し、さらに各自で講師の経歴などを調べ講演会に臨ませる。
<p>8主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・心に響く効果的、効率的な教材作りと指導方法。 ・講師を招聘する為の日程調整等に課題は残るが、この取り組みを継続して行っていきたいと考える。 ・講師の方から直接、全校生徒を対象としての体験活動を実施するには、場所や取り組みを考える必要がある。
<p>9来年度以降 の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の成果と課題を踏まえた上で、来年度以降も改善を図って実施していきたい。